

第二期 第九十五号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024.06.10 定有堂書店 発行

ソリテール

「本のある場所」日記 二〇二四年五月  
いざ太平洋へ

通勤電車に現る師

In the city, one step beyond.

ほんやづくり日記

本を作る側から (15)

汽水のほとりから (39)

生き方、死に方

これは本ではない

鳥取あれこれ その九十四

内坪井町日記 (1)

わたしのことは

とこのう

ご案内

…… 編集後記

奈良 敏行

南陀楼綾繁

岩田 直樹

木元 健二

高木 善祥

鳥居 貴彦

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラメリア

## ソリテール

奈良 敏行

(定有堂 主人)



『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』が五月二十日に三刷りとなり手元に届いた。書評を記録として書き留めておきたい。

三月九日大井実さん『西日本新聞』、三月十五日北野保司記者『日本海新聞』、三月十七日角田光代さん『毎日新聞』、南陀楼綾繁さん『産経新聞』、四月五日日野剛広さん『小説丸』、四月七日『読売新聞』、四月二十一日石山府子さん『北海道新聞』、四月十五日齋藤明彦さん『日本海新聞』、四月二十九日すすきたけしさん『ダ・ヴィンチ web』五月一日『月刊ブレーン』、五月四日笈入健志さん共同通信配信『福島民報』、下野新聞『山陰中央新報』、『中国新聞』、『山形新聞』、『神戸新聞』など、五月二十五日岩田直樹さん『図書新聞』(一面トップ)。

『町の本屋』は終わってしまった物語なので、哀悼の意を込めて多くの人が語り継ぐ。

「独立系書店」という言葉はよく耳にするが、そうでなく中央からも離れ、本屋の群れ(ネットワーク)からも離れ、本場に「ひとりりで立っている」と定義してくれたのは内沼晋太郎さんがはじめてだった。書店へと拡散し、本屋へと縮減する、その端境に出現し、消えた、スタンドアローンの本屋だった。多くの書評の勘所も、そんな感慨に基づいていた。スタンドアローン、そして気概、それが定有堂のキーワードだった。

スタンドアローンの気概は続く。「本屋が読書に追い越される」と予言めたことを述べたが、このトレイルは本屋のけもの道だ。足跡は前方にも後方にも長くつづく。

五月十六日は定有堂教室「読書室ビオトープ」の会だった。第十三回。テキストはケストナーの『飛び教室』だった。報告者はH・Hさん。

刊行は一九三六年スイス。ナチス政権の誕生が一九三三年。ギムナジウム(九年制の寄宿学校)での五人の少年を主人公とした物語。クリスマスの催事として、世界各地を巡る「飛び教室」、という演劇の公演を巡るべきことが語られる。寄宿自治というドイツの伝統的な教育制度を背景に、熱量の中心は「勇氣」。主要な登場人物として大人も二人登場する。教師で舎監の「道理」さん、そして今ふういというとヒッピーのような自由民で、一人近くの廃客車に住む「禁

煙」さん。列車が禁煙車両なのだ。「禁煙」さんは、ギムナジウム風のけんかの仕方も教えて尊敬される。じつは二人はこの学校の卒業生で先輩だった。少年たちが二人の同窓生を再会させるところで物語は終わる。精神の永遠の反復がそこにあり、ギムナジウムはすばらしいものと知れる。

「禁煙」さんは老成した隠者のような風情だが、じつは三十五歳くらい。少年たちとともに遊ぶのだが、「終わった人」なのだ。少年たちは将来にたくさんの願いを夢見る。「禁煙」さんは何者にもならず、故郷に流れ着く。しかし家へも戻らず、学校の近くの廃客車で暮らす。少年たちの力で「道理」さんに引き合わされ、校医として所を与えられる。多くの旅立つ若き魂と、遍歴の末夢を失って帰郷した大人との交錯する物語、とわたしは読んだ。ナチス革命前夜の薄明のよくな一瞬だ。

ソリテールというものを考える。単独者だ。「禁煙」さんに記憶を呼び起こされ、ヘッセの『漂泊の人』が甦ってきた。大学の頃に読んだ本だ。主人公クヌルプの物語だ。故郷を離れ定住することなく放浪する。でもなぜか友人が各地にいる。古めかしい言葉だが粹な「遊び人」なのだ。才能豊かで、友人たちと同じような仕事にもたずさわることができ定住することもできた。でも「異人」として生き抜く。この漂泊の人は旅で病んで故郷へと足を向ける。他に行く当てを思い

つかなかったからだ。自分の未来を垣間見せるようで、心を騒がせた本だ。

読書会とは関係ないのだが、ふと思い立って、このところツルゲーネフの『ルージン』を読んでいた。書棚にあったからだ。本屋の棚でなく自分の書棚に向き合うことが多いとなった。他に行くところがないからだ。ルージンは「無用者」の典型として一時期人の心をとらえた。中央の最新の知識を吸収し、地方の文化サロンに現れて人を煙に巻く。人に何が必要かを雄弁に語るのだが、自分自身はその「真実を何一つ実行し得ないで、人々に見放される。話の落とし所もないので、ルージンはフランス革命の一揆の先頭で流れ弾に当たって一命を落とす。

本にのめり込んでいると、行き着く果ては「無用者」しかないように思えた。本を読んで行く先に、「現実」はいつまでも始まりようがない。本の世界はあまりに豊かすぎて、教養主義の時代は出口のない時代だった。原口統三の遺稿集にも震撼とさせられた。無用者は二葉亭四迷によって小説化され、『無用者の系譜』には唐木順三が日本文化史としてまとめられている。

《身を用なき者と思いなすことよって、新しい世界、現実とは次元を異にする抽象、また観念の世界が開かれた》

本を読むことが無用者へのトレイルであった時代があっ

たのだ。

無用者のクナルプは病み衰えて故郷へ向かう路上で息絶えるのだが、幻視の時が訪れる。一生が走馬灯のように立ち現れる。結局どこにも居場所が見つからず、路上に生き路上で息絶える一生だった。これでよかったのだろうかと自問自答する。たしかに美しいときがあった。しかしおもえばその幸福の中にわざわざの毒針がかくされていた。

幻覚の中に神の言葉が聞こえる。

《なげいて訴えてみた所で、何にもなりはしない。何もかもそれでよかったのだ。全ては、それで正しく行ったのだ。何一つ変更されてはならなかったのだ。》

クナルプは眼を閉じる。

《ではもう何も悲しむことはない、と言っただね？》

《そして、何もかも、それでよかったのだね？》

思えば五十五年前、この一言を支えとして人生の一步を踏み出した。本当に良かったのだろうか。この神の声は、何一つ目的や行き先を示さなかったが、無為徒食に本を読み、やがて鳥取に定住の所を得て、四十三年「本屋」を生業とすることができた。

2024.5.24

# 「本のある場所」日記 二〇二四年五月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

5月28日

朝、上野から新幹線に乗り、那須塩原駅で降りると、伊藤芳保さんが迎えに来てくれた。伊藤さんとは、新潟水俣病を描いたドキュメンタリー映画「阿賀に生きる」のファンの集まり（追悼集会）で知り合った。那須の植木屋さんで、好奇心旺盛にさまざまな人と交流してきた。若い頃から会津に通ってきたと聞き、案内していただくことになった。

伊藤さんの車で那須高原、塩原温泉を抜けて、福島県へと入る。あいにく雨が激しくなってきた。

まず、南会津町の田島にある〈奥会津博物館〉へ。奥会津は会津地方の南側の7つの町村を指す。「会津」でまずイメージするのは会津若松だが、奥会津には若松とは異なる独自の民俗や文化がある。この博物館には山や川の仕事祭りや信仰などに関する豊富な展示物があって、見飽きない。

パネルで判らない点を、学芸員の渡部康人さんが解説してくれる。江戸時代、会津の南側は「南山御藏領」という幕府の直轄地（いわゆる天領）だった。そのため、会津藩が支配した北部よりは支配がゆるく、歌舞伎文化が花開いた。170もの歌舞伎舞台があり、衣装をレンタルする業者までいたという。それでいて、幕府の歌舞伎禁止令から逃れるため、「歌舞伎」を「踊」「芝居」などと言い換えている。奥会津の民衆のたくましさを感じた。同館の企画展の図録『会津の歌舞伎』を買う。

さらに北上すると、昭和村に入る。移住した人が営む（お茶っこランチ）でチキンステーキ定食を食べる。750円だがボリュームがあり旨い。

廃校になった小学校を利用した施設（喰丸小）へ。地域の人たちが教室を利用できる。奥の教室で月に数回オープンするのが、〈燈日草（ともしびそう）〉という小さな本屋だ。店主の菅家洋子さんが選んだ本をテーブルの上に平置きする。100点程度だが面白い本が多い。あまり人が来そうな場所には思えないが、インスタグラムで営業を知った人たちが次々にやってくる。洋子さんと話すのが楽しみなのだろう。店で受け付けている「イスラエルのジェノサイドを止めるための請願署名」に名前を書きに来た人もいる。

そのなかに、須田雅子さんという、昭和村に魅せられて関東から移住した人がいた。ライターとしてこの村の人たちに聞き書きしているそうで、『会津嶺(あいづね)』という月刊誌でも連載している。同誌は500号以上続く地域雑誌だ。

洋子さんの連れ合いの菅家博昭さんは、この地でかすみ草栽培を行ないながら、昭和村の伝統産業である「からむし」(衣類や工芸品の素材)栽培技術の継承に尽力してきた。また、独学で会津の歴史や民俗を研究している。博昭さんが代表を務める会津学研究会の研究誌『別冊会津学』2号(特集「紙漉ぎの未来を拓く」)と、洋子さんが沖繩の戦跡を歩いた文章をまとめた『降りながら、照る場所へ』という冊子を買う。その後も、座って話しているうちに2時間が経ってしまう。

最近開通したという博士峠のトンネルを抜けて、会津若松へ。これまでに何度か来ているが、「この家には戊辰戦争の際の刀傷があつて」など伊藤さんの解説を聴きながら町を回ると、また新鮮な印象がある。夜はホテルの近くにある〈ぼろ蔵〉という、おかみさんが一人で営む居酒屋で地元の酒と料理を堪能する。たまたまカウンターの隣に座った70代に見える女性から、ずっと前に青津の歴史春秋社に勤めていたと聞き、驚く。

5月29日

朝から産直、県立博物館(幕末明治の浮世絵展)と回り、猪苗代町の〈はじまりの美術館〉へ。日常の中の表現を楽しむ展覧会を行なってきた。開館10周年企画で、方向性は異なるが、いずれも熱気にあふれた作品に接することができた。外に出ると、受付にいた男性が追いかけて来て声を掛けられる。一箱古本市を開催するBook! Book! Aizuのメンバーで、開館時から同館で企画を担当しているという。

若松方面に戻り、〈会津美里町郷土資料館〉へ。昨年開館したということは何気なく寄ったのだが、民俗学者の山口弥一郎の出身地だった。山口の『津浪と村』は1933年(昭和8)の三陸大津波による集落移動を追った名著で、東日本大震災後に復刊された。二階の図書室で、山口の『東北民俗誌 会津編』を手取る。故郷への思いが込められているような本だった。

夕方、那須塩原駅に送ってもらい、会津の旅は終わった。いつものことながら、今回もまた、「本のある場所」をめぐる旅になった。

## いざ太平洋へ ― 洋上での「転向」 (六)

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授・「読む会」講師)

### 四 黒潮の波頭を越える

四月中旬、晴海埠頭を夕刻に出航。羽田空港を発着する航空機が夕日に反射して美しい。私たちは、東京湾を出た途端に黒潮の洗礼を受けた。

海洋研究開発機構のデータによると、当時、黒潮が紀伊半島から東海沖で大きく離岸する黒潮大蛇行が発生していた。正確な観測記録が残る一九六五年以降、現在までに六回の大蛇行が発生している。私たちが経験したのは八一年一月から八四年五月にかけての二回目の大蛇行だった。(現在の大蛇行は二〇一七年八月からはじまり、継続期間の記録を更新中である。)

黒潮という語に、皆さんは何を連想するだろうか。私が真っ先に思い浮かべるのは、日本民族の祖先が黒潮に乗って北上したという柳田国男の壮大な構想『海上の道』(一九六一年)や、帝大生だった柳田が伊良湖岬の突端で椰子の実を見つけ、その話を聞いた島崎藤村が「椰子の実」の詩を詠んだエピソードである(『故郷七十年』一九五九年)。

ロマンチックな文学的テーマとは離れて、江戸期にアリュール・シャン列島まで流され、サンクト・ペテルブルグでエカテ

リーナ二世に謁見し、ロシアの黒船で帰国した大黒屋光太夫を思い起こす人もいるだろう(山下恒夫『大黒屋光太夫』岩波新書、二〇〇四年)。

黒潮、親潮、対馬海流、リマン海流などといった名称は小学生のときに習う。しかし、海流の具体的な姿は存外知られていないのではないかと。

黒潮は地球の自転が生み出した産物だ。幅は約一〇〇キロ、最大で四ノット(毎時七キロ超、一ノット＝毎時一八五メートル)に達し、水深六〇〇〜七〇〇メートルで一ノットになる。規模感をつかむのは難しいが、私たちの住む中国地方が平野も山地も丸ごと、毎秒二〜三mで移動することを想像してみるといい。流量はアマゾン川の一〇〇倍以上、世界で最も強い海流である。

地球温暖化がこれ以上進むと、西から東へ向かう流れがより強くなり、大蛇行は起こりにくくなると言われている。現在の大蛇行が、地球史における最後の黒潮行とならないことを祈るばかりである。

黒潮と聞くと、杉ノ原伸夫先生(海洋物理学)の穏やかな笑顔をいつも思い出す。ある日の地球流体物理学の講義だったと思う。杉ノ原先生はニコニコしながら一〇人ほどの受講者に青焼きの図表を配布してくださった。北太平洋を長方形と仮定して、そこに地球の自転によるコリオリ

力が加わるとどのような海流が生じるか、のシミュレーション結果だった。

当時、計算機センターという五階建ての建物があり、私たち学生は五〇人くらい入る端末ルームで、計算機演習を受けていた。コンピュータという言葉は使わず、電子計算機と言っていた。ちなみに、現在のノートパソコンやスマホは、当時のビル一棟分の計算機より何万倍？もの性能を有している。

杉ノ原先生は、その計算機を何日も動かして、ようやく黒潮を再現したのだった。とてもうれしそうな笑顔を忘れることができない。

私は、朝日新聞の記事（二〇〇七年三月六日付）をカバンに入れて持ち歩いている。癌で亡くなられた一ヶ月半後に、先生の人物像と業績を記した写真入り縦一五センチ×横二五センチの大きな記事が掲載された。私たちが教わっていた頃の優しい笑顔の写真を見るたびに、あの講義を思い出す。

四月中旬だから天候は悪くない。東京湾は「べた凧」である。しかし、太平洋に一步踏み出すと、大きなうねりが私たちを襲う。

私は全く船に酔わない体質である。かつて勤務高校が修学旅行で船を使っていた時期がある（一九九四年から五年

間、行先は長崎や釜山など）。対馬海峡の六メートルの大波にも平気だった。そのときは、教員や生徒が酔いで寝込んでしまい、点呼や食事どころではなかった。北海道や九州へ行く長距離フェリーに一〇回以上乗ったことがあるが、少々揺れても陸上と同じように過ごすことができる。

そんな私が生涯でただ一度だけ、黒潮を横切るときにひどい酔いになった。一晩中、トイレと船室のベッドを往復した。夕食後に、顔合わせを兼ねた全員ミーティングが予定されていた。もちろん出席することができず、「あいつは黒潮が初めてだから仕方ないな」という話になったらしい。

記憶が定かではないのだが、乗船したのは研究者が約二〇人、船員は三〇人くらいの総勢五〇数人だったと思う。研究テーマは、海洋プランクトン、地震計の設置・回収、地磁気編状異常計測（私たちのテーマ、内容を話せば長くなるので省略）などであり、研究者たちは、北海道大学、東京大学（海洋研究所）、神戸大学、長崎大学、中国・杭州大学などに所属していた。

翌朝は快晴。黒潮を横断した白鳳丸は、凧の太平洋を右舷方向に伊豆諸島、小笠原諸島を望みながら、一気に南下する。

## 通勤電車に現る師

木元 健二

(新聞記者)

あ、いいな。

寝ぼけ眼の私。それでもせかせかと最寄り駅に向かいつつ、そう思った。

きりつとした日差しを感じさせる初夏の朝。電動キックボードに乗った女性が、目前のだから坂の横断歩道を下ってゆく。すーっと長い髪を涼しげになびかせて。スーツ姿だったから職場にでも向かっているのだろう。

こちらは通勤電車でも都心に向かう。商売道具の入ったリュックは背負わず、腹に抱え、猫背気味になって乗り込む。混み合う電車だけに、硬くて重たいパソコンの角などを背後の乗客にあてないよう、というお作法である。

食い意地が張っているせいだろう。腹をくだしがちな私である。始業に間に合うよう、あまり停まらぬ特急電車に乗るのだが、ふいに先行き不安にかられることがある。するといけない。出っ腹のままでグルグルしてくるのだ。

予防策は「読む」ことだ。新聞や本を取り出していたの

は、もはや過去のこと。デジタル版の新聞を開く。電子書籍キンドルには読みたい作品が、ずらりと並んでいる。どちらでもスマホで見えるものだからかさばらない。何より進む老眼には字の大きさが自在なのが、実にありがたい。

それにキンドルは気になる文章を指でなぞるだけで多様な色がついてゆく。文字の世界にうまく入ってゆければ、たいていの場合、腹も落ち着いてくるのだ。

ワイヤレスヘッドホンも持ち歩いて、スマホ経由のダウンロード音楽も聴けるようにはしている。ただ、こちらにはどうも腹の不調を忘れさせる力が感じられない。ジャズもクラシックも分かったような顔をして、なんにも分かっていないからか。歌詞の意味も知らないのに英語のロックを好んでいるからか。いやいや懐メロの歌謡曲を選んでみただめだった。

ホスピスケアで知られる、鳥取・野の花診療所の徳永進院長に「聴力は最後まで残る」とうかがったことがある。私の場合、どうなるのだろう。ちよつと先回りして考えてみる。

通勤時間は往復二時間ほどになる。毎日のことだから結構な時間だ。一日二時間ということを思うと、直木賞作家、藤本義一のエッセーが忘れられない。若き日、映画監督

の川島雄三の身辺で世話をしながら、シナリオ修業をしてきた時に聴かされた話だという。

何度読み返しても、鬼才の二人ならではの言葉を記した名文だと感じ入る。少々長くなるが、引用したい。(一九九三年一月二十七日、朝日新聞夕刊文化面)

「藤本君、君は天才でもなんでもない。君が頭で考えていることを一〇〇としようか。その考えを君は言葉にする」と一〇になる。さらに、それを文字にすれば一になる。考えの〇・一パーセントが文学だと思え。せめて死ぬまでに〇・二パーセントか〇・三パーセントにもつていくのがプロだ。そして、自分で一日に自分だけの時間を管理しろよ」私は、この師匠の言葉を三十七年間守ってきた。一日最低二時間は誰とも話さない時間をもっている。(略)あの師匠に出会わなかったら、私は自分の時間にも出合わなかった気がする。く

通勤の二時間も、使いようなのは間違いない。ただ、凡人の私はぼんやりしていることも多い。それでも車内から広告をながめていると、世相の一端を知ることもある。近頃、首都圏でウナギ登りに増えている鰻チェーン店の勢いを知ったのは、つり革にその名を刷り込まれていたからだ。婚活の広告でもセレブ向けもあれば、いかにも「黄昏」と

いうイメージの、年配向けの会名も見かける。どちらも縁が無いなと思っていた。ただ五十代半ばにもなった私に向いているのは後者だ、と思ひあたる。以来、黄昏広告はどうもまっすぐ見られない。

私を利用してはいる京浜急行の、蒲田駅(東京都大田区)に設けられた「京急蒲田コハイ駅」の看板が撤去されることになった。

この試みも、初めは中刷り広告で知った。だじやれの軽快な感じが起用した女優田中みな実のイメージとも合っている。サントリリーによる、気軽に飲める「サワー」のキャンペーンの一環。昔から宣伝上手で知られる会社らしくてオモロイナ。実はそう思っていた。

でも、アルコール問題に取り組む団体から「公共性が高い駅にはふさわしくない」と掲示の中止を求められたという。「駅は不特定多数が利用する公共性が強い場。酒類広告はなじまず、公共性を無視している」とする申入書に応じたのだとか。

そう言われたら、そうか。こんな時代、だじやれにも「ときどころ」があるのだと省みた。私の二時間は、私の浅慮も教えてくれる。

# In the city, one step beyond.

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

一箱古本市に出店するときになんとなく作った名前で、まさか本当に本屋を始めることになるとは…

しかし、物語は往々にして予期せぬ形で紡がれる。羊とは？ ユダヤ教／キリスト教／イスラム教における生贄。弱さと崇高さ。「私は善き羊飼いである」と語るイエス。羊たちの沈黙。羊皮紙。群れる生き物。そして本。

デザイナーとやり取りをしていて、本を読みながら、背中合わせで寄り添っている二匹の羊の姿が思い浮かんだ。「しつくりきた」という表現が一番しつくりくる。出来上がった口ゴを眺めながら、オープンの挨拶文を考えた。

一つだけネタ晴らしをすると、宮下奈都さんの『羊と鋼の森』（文春文庫）が念頭にあった。音楽に全く縁のなかった主人公の青年が、偶然出会った調律師の仕事に魅せられ、自らもその道を歩んでいく物語。二〇一六年本屋大賞の受賞作で映画化もされたので、ご存じの方も多いかもしれない。

序盤で原民喜の言葉が引用される。「明るく静かに澄ん

で懐かしい文体、少しは甘えているようでありながら、きびしく深いものを堪えている文体、夢のように美しいが現実のようにたしかな文体」。師と仰ぐ調律師に目指す音を尋ねた時に返ってきた言葉は、そのままこの物語にも当てはまる。やさしく静かだけれど、強い。プルーフで読み、単行本でも読み、文庫化されたタイミングで、それぞれ三回は読んだ。人生で何度も繰り返し読む本は五冊ほどしかないけれど、その内の一冊。

オーブンまでに、本当に（本当に！）たくさんの方にお世話になった。何よりもまず、奈良さん。「二階の太極拳教室していた部屋が空いているけど、どう？」と声をかけてもらわなければ、多分いまもプラプラしていたに違いなし。そして永井さん。退職後もずっと気にかけていただいた。

店舗の修繕やレイアウトについては、建築家の木下さんにたくさんのアドバイスをいただいた。

店を開くにあたって最初の大仕事である、什器の移設。定有堂書店で使われていた本棚を、二階に上げてくれたのは、読書会のメンバーや私の元・同僚。あの細くて急な階段を通せたのは本当に（本当に！）偉業。

また、たくさんの方に貴重な蔵書を譲っていただいた。

自分の興味とは重ならない本も多く、ついパラパラとめくってしまう。それらが自宅から運んだ私の蔵書と合わさることで、本の並びがぐっと面白くなった。

仕事用の口座を開くためにおとずれた銀行で、窓口の方が「本屋さんをされるんですか？」と嬉しそうに言ってくれたのが印象的だった。

SNSは当初はインスタグラムのみ。静かに準備したいけど、多少は宣伝も必要。間を取って、新聞に記事が載るまでは、あえて自分の名前は出さず、直接の知り合いはなるべくフォローせずに運用していた。

四月に入って、少しずつ友人や知り合いに本屋を始めることを伝える。

そろそろ本格的に告知しようと思っていたところ、お誘いを受けて、三角公園の近くにできた「みぶくや」でのイベントに出店。古着屋をやっている方や街づくりに関わっている学生さんなど、新しい出会いもあった。続けて、四月二十九日の川端の賑わい日にも出店。友人・知人・ご近所さんにごあいさつ。この頃には、すでに開店を知っている方もチラホラいた。やはり口コミは強い。皆さんから、楽しみにしてるよ、と心強い言葉をいただく。

続きはここか、または別の場所で。

最後に、色々なことをフォローしてくれて、お店の作業も手伝ってくれた家族に感謝。(あとがきっぽいことを書いてみた)

#### 【参考文献】

辻山良雄『本屋、はじめました 新刊書店「二二」開業の記録』苦楽堂

和氣正幸『日本の小さな本屋さん』エクスマレッジ  
読み物ではなく、実務書として読み直した。

高田郁『銀二貫』（ハルキ文庫）

商売の機微を思い出すために再読。



定有堂ビル2階・古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

# わかりやすくはない日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

小学校にはいる子どもの粘土を買いに行く。粘土ってどこで売ってるんだろうか。ジャンルがわからない。おもちゃ？文房具？それとも土？ 駅前の大きなビルに行けばいいのものは揃う。店内のいたるところに文字がある。こっちはカメラ、こっちはパソコン、ここを上がるとご飯が食べられるところ。お買い物しやすく、わかりやすく。わかりやすさは度を越すと目がチカチカしてすぐに帰りたくなる。文房具売り場とおもちゃ売り場のややおもちゃ売り場より、のところに粘土はあった。そそくさと売り場を後にする。

家財整理をやっているおっちゃんから電話がかかってくる。「最近はない、〇〇さんとこの息子がコロナなったりなあ」と全然知らないひとの近況をしばらく聞かされたあとに「向島の団地の向こうなんやけど来るか」と唐突に要

件を告げられる。家財整理の現場に古本がたくさんあるから引き取って欲しいと言っこのようだ。「とりあえず九時に観月橋の」と言うことだけ決まって電話は切れた。翌朝九時前、また電話。「あんな、観月橋渡ったらカーブがあるやろ、ほんで団地がたつとんねや、三本くらいな。その中の、六十三番が黄色、つぎが緑、次がグレーな」道案内をしているのかもしれない。黙って聞く。「ニトリがあるわな、それを越える前に団地の方に入るんやな」電話の向こうで別のおっちゃんが「マクドナルドもあるでえ」と口を挟んで「ややこしいことを言うな」と怒られている。「バスの道のね、カーブを曲がった先におるさかい、お願います」結局どこへむかったらいいのかよくわからない。地図を眺めてニトリとそれっぽいカーブを探す。住所と番地をメールしてくれたら一瞬で済むのかもしれない。でもさっぱりわからない道案内の方が言ってやろうと言う気になるのはなぜなんだ。

岩手に呼ばれた。丘の上にある古民家で古本を売ったりして欲しいと言う。古本を売ることではあるが「たり」はなんだろう。わからないまま飛行機に乗って、わからないまま東和という町についた。遠くに雪をかぶった山が見える。丘の上に立っていると向こうのほうから風がまつす

ぐやってくる。なににもきまげられることのないのびのびとした風。すでに会場にはおじさんたちが集まっていた。軽トラックが何台かやってきて、運転席からおじさんたちがのぞいていく。「今日は天気がいいから農作業が忙しい」とおじさんが教えてくれた。忙しいけどのぞいていく。それも次々と。子どもたちも集まってくる。散歩したり、豚汁を食べたり、座っている子どもたちを眺めたりする。「えー、みなさん、自分の子どもは忘れずに連れて帰ってね」という一言で一日が終わった。なんのイベントだったのだろう。イベント、と言う言葉もしっくりこないような一日だった。わざわざ東北まで行ってなにしてきたの、と聞かれるとよくわからない。いい一日だったよ、と答える。

「テレビ番組をつくっているものです」という電話がかかってくる。町家で商売をしている人たちを取り上げたいという。「○○さんがうかがいます」と有名なタレントの名前も言う。そうですか、うちでよければ、と電話をきる。収録の日、四人の男たちがきた。「こここここいじりまじよか」などと喋っている。今度古本市やるんで宣伝してください、などと口を挟む。カメラが回り始めると急に声が大きくなる出演者。どうせ聞かれるんだらうなと思っていたが案の定「店主さんのおすすめの本とありますか」とか

言われる。あー、と思いながら本以外の言い訳を探して13いる。ピーナッツとかだめですか？と聞くがだめっぽい。カメラは回り続けている。

ひとに本をすすめるのは嫌いではない。そのひとの好みや普段の生活のことを聞きながらどんな本が似合うか想像するのはたのしい。「それはもう読みました」と言われると間違っただけな気がちになる。何度も本を買ってくれりひとにはどんな本がいいかなんとなくわかる。来ていきなりおすすめはなんですか、と言われるとちょっと困る。テレビの向こうの会ったこともないひとにはなにをすすめたらいいかわからない。

雨の中、四人の男たちは帰っていった。放送時間は十分ほどだという。いったいなにが写っているのだろうか。

## 本を作る側から (15)

村瀬 謙介

(小取舎)

最近、本屋が日本から消えているというニュースをよく見る。二〇二〇年でおよそ八〇〇〇店舗も減っているということ、出版文化産業振興財団の調べによる、全国の自治体一七四一のうち四八二、つまり四分の一以上に書店がないということ、それに伴うユニークな対策を取っている店舗をいくつか紹介して終わり。中にはシェア型書店を新しいものだと紹介している番組もあり、スタジオの人間の「へえーそんな書店もあるんですね」という、書店に対してそこまで関心のなかつたことを露呈するような発言もある。十年以上前から各地にあるのだが。

最近、「書店減少、なんとかならないもんかね」という気持ちと「もう諦めるしかないよね」という気持ちの両方が湧き上がる。私はデジタルネイティブな世代ではないので学生時代までの情報収集はもっぱらテレビと本屋さんだった。インターネットが普及したのなんて感覚としては

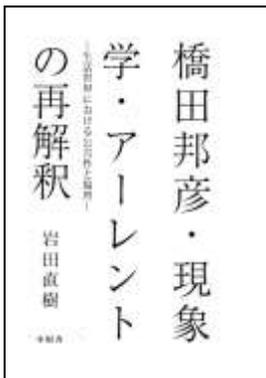
二〇〇〇年代に入ってから。それまではパソコンを立ち上げるのも何分もかかり、携帯電話で動画送信なんて遅いし画素が粗すぎて見れたもんじゃない。冗談ではなく自転車でピューっと書店に走った方が欲しい情報が早く手に入っていた。その書店がどんどんなくなっているということは正直本当にまずいことだ。

エッチな動画をレンタルビデオで借りたことがある男子は、ネットが普及するにつれ、店舗面積の三分の一がそれ系のレンタル店の存続危機をいち早く察知していた。YouTubeをみんなが見始めるころになると街のレンタルビデオ屋さんもかなりの店舗が閉店していった。それは映画のかわりにYouTubeが取って代わったわけではなく、「何か面白いものを借りに行こう」と週末レンタルビデオ店に行く多くの人達を店舗から遠ざけたからだ。定額制のサブスクで映画も観えるようになると、行く意味が本当になくなってしまった。学生時代レンタルビデオさんに平気で三、四時間いたりする映画少年だった私ですら行かないので、そりゃTSUTAYAちゃんもレンタル事業から撤退するわなっと思う。

書店減少に対して出版者である私が「諦めるしかないよね」と思うのは意外かもしれない。だってしょうがないじゃない。人口が減っていつてるのだから。書店だけでなく全ての商売に言えること。消費者自体が減っていますから。四月に発表された、消滅可能性自治体（若年女性人口が二〇二〇年から二〇五〇年までの三〇年間で五〇%以上減少する自治体）が七四四自治体もあるという。鳥取県でも八つの自治体が危機にあるという。消滅可能性自治体から脱却した町もあるのでこのまま消滅するのを待つしかないわけではないが、果たして三十年後、五十年後はどうなっているのか。地方自治体だけの危機ではない。今は東京への一極集中化とも言われているが、不動産業界では二〇二五年を境に、東京でもマンション含め空き家が増えてくると言われている。

何年か前まで移住促進について懐疑的だった。国民全体の人口が明らかに減ってきているのに取り合ってどうするんだと思っていた。最近に移住に大賛成。少ない地域に都市部から移住してきてほしい。限界集落から人が完全にいなくなるとその土地の道路や水道などのインフラ管理は行われなくなる。全国民が日本中の市区町村に分散化されるのが理想だと思うがそんなことは夢のまた夢。それが出来たら書店はなくならんよ。

もうひとつの思いである「なんとかならんもんかね」について。書店×八百屋とか、二十四時間営業の書店、四畳半の書店など様々な取り組みで生きながらえようとしている書店さん。そこにニーズやウォンツがあるから成立して、それがユニークだから取り沙汰されているのだが、本当にポツンと老夫婦が（やり始めた頃は若夫婦）やっているようなお店がなくなっていく。そこには後継者がつかないという問題もあり、その観点からも何か対策ができなかったのかと思う。教科書を扱う書店もそもそも子供の数が減っているのではどうなるのか不安だ。



# 汽水のほとりから (39)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

先日、鳥取市青谷のおおや郷土館で開催された企画展「本初の女性弁護士 中田正子」を観てきた。現在放送中のNHK連続テレビ小説『虎に翼』の主人公のモデルとなった三淵嘉子に注目が集まる中、彼女とともに日本初の女性弁護士となった三人のうちの一人で、その生涯の大半を鳥取の地で生きた中田正子を取り上げた企画展である。中田正子に関する資料は、鳥取市歴史博物館やまびこ館が所蔵しており、彼女の歿後四年目の平成18年にまとめ一度公開されているが、今回はその際に尽力された学芸員の奥村寧子さんの現在の勤務先での開催となったようだ。

この企画展初日に、前号で詳しく紹介した米子市在住の写真家、庄司丈太郎さんが御夫婦で足を運ばれ、まもなく次のようなメールが届いた。「青谷は家内が中田正子さんの展示を観たくて行きました。何と正子さんの御主人が中田吉雄(社会党)のオジサンとは今日の今日まで知りませ

んでした。私の実家にいらっしやった時は随分可愛がられたモノでした。オジサンが嫌だったのは何時も土産は豆腐竹輪!不味かったですねえ〜。このメールをもらうまで私は中田正子についてほとんど何も知らなかったし、夫の中田吉雄については名前さえ聞いたことがなかった。

このメールがきっかけで、私は庄司さんが個人的によく知るといふ中田吉雄という人物に興味が湧いたのだった。中田吉雄とはいったい何者か。無論、彼は有名人である。ウイキペディアで検索ができる程度に。しかも、それほど遠い過去の人ではない。歿したのは昭和60(一九八五)年で、現在後期高齢者に該当する方なら、政治家としての彼の名前をどこかで耳にした人は多いのではなからうか。調べてみると、中田正子を顕彰するならば、彼についても知っておかなければいけないというくらい的人物である。

中田吉雄については、歿後二年目に非売品で刊行された『中田吉雄の生涯』が最もまとまった資料だと言えよう。日本社会党鳥取県本部に設置された刊行委員会が出したもので、編者は吉雄の秘書だった谷本壮という人である。函入りの立派な本で、自伝的な記事も掲載されているが、知人や友人らによる追悼文がそのほとんどを占めており、彼らは口をそろえて吉雄が大変な努力家・勤勉家だったと証言している。吉雄は真東部の若桜の生まれだが、倉吉農

学校（現倉吉農業高校）に進み、鳥取高等農林学校農学科（現鳥大農学部）を経て、京都帝国大学農学部に進学した。

だが、全てが順風満帆だったわけではない。帝大卒業後は食糧庁（当時）に就職が内定していたが、直前に結核に罹り、療養生活に入らざるを得なくなる。或る人の世話で正子と結婚したのはその六年後のことである。病気はまだ治つてなかつたが、正子はそれを承知で結婚したようだ。帝大卒とはいえ、悪条件の縁談は婚期の遅れた女性だったからか。もともと正子の父親が鳥取県汗入郡（現米子市）出身なので、同県のよしみで持ち上がった縁談の可能性もあろう。が、間もなく療養を理由に二人は別居を余儀なくされる。吉雄は若校へ帰り、正子は東京で弁護士を続けた。

中田正子は追悼文の中で当時の心境について、「しかし私としては、何故かきつと癒ると信じていたので悲観的にはなりませんでした」と述べているが、正子が終戦直前に鳥取に疎開する頃には彼の病気も完治し、二人は子宝にも恵まれることになる。以来、正子は東京に戻らず、生涯を鳥取の地で過ごした。もし吉雄が病に罹つていなければ、徴兵されて戦死していたかもしれないし、正子もそのまま東京で弁護士を続けていたかもしれない。その後、吉雄は県議会議員となり、更に日本社会党から参議院議員として立候補して当選。十五年間務め、還暦を期に現役を退いた。

ところで、『中田吉雄の生涯』に掲載された地方新聞17の追悼記事の見出しには「県議会図書館生みの親」とある。鳥取県の県議会図書館は日本で最初に設置されたもので、そのことは県のHPも触れているが、残念ながら吉雄の名は見えない。が、しづる県を押し切った末の彼の功績は、地方自治法改正による議会図書館設置の契機となったと言われる。彼は郷里で療養中に県立図書館の蔵書千数百冊を読破した人で、議員たる者は誰より勉強せねばならぬと考えていた。国会議員になってからも国会図書館の中に中田の姿を見ない日はないと人に言わしめた人であった。そうした努力家・勤勉家の面を見抜いていたからこそ、正子は結核が完治しなかつた吉雄を結婚相手に選んだのだ。そして、自分がそうであつたからこそ、その努力を彼が弱い者の味方になるためにする人間であることをも見抜いたのだ。彼が左派政党の日本社会党から立候補したのは偶然ではあるまい。ストライキやデモが当り前だった時代。私が幼い頃、七年前に亡くなった父が日本社会党を一貫して支持していた当時のことを懐かしく思い出した。

## 生き方、死に方

定有堂倉吉支店その五十四

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

年下の友人が先週、がんで亡くなった。53歳だった。彼は倉吉に暮らしていたが、実は定有堂書店と少し縁がある。

◇ ◇ ◇  
出会ったのは30数年前、私が働いていた新聞社が、彼の勤務する系列のケーブルテレビ局と合同で忘年会をすることになり、たまたま隣り合わせの席になった。

「実は僕たち、ビートルズのコピーバンドをやっているんですよ」「えっ、それはぜひ聴かせて欲しいな」

そこから、彼がドラムのリンゴ・スター役を務めている「倉吉ビートルズ」との長い付き合いが始まった。

やがて彼らは、英語教師で倉吉に来ていたイギリス人女性の「ブライアン・エプスタイン(ビートルズの元マネー

ジャー)」並みの奮闘もあって、本場のリバプールやロンドン、エジンバラへの演奏ツアーに毎年のように出かけるようになった。

イギリス公演で長い休暇を取る彼には、社内でいろいろ風当たりも強かったらしい。すると彼はすっぱり退社してしまった。「会社か、自分らしい生き方か」、迷うことなく決めた彼に驚かされたが、いや、それが本当の生き方ではないか、とも思えた。

◇ ◇ ◇  
そんな自由な彼の生き方を、「音信不通」で何度か取り上げたことがある。

「若い友人から『来年にはカレー屋をやりたい』と告げられた。彼は『器用貧乏』という言葉が服を着て歩いているような男で、ドラムはスティックを握ったその日から叩けたというし、ブルース・ギターもうまい。音響や電気技術の知識が豊富で、料理の腕はプロ並み。なのに、転職を繰り返している。趣味は釣りとキャンプで、かつこよくカスタマイズしたバイクに乗っている。

結婚は2回しているが(そのうち1回は私が仲人をしたが)、今は郊外に山小屋風の小ぶりな家を建てて、独身生活を楽しんでいる。もうホントに頼ったつねりたくなるほどかつこよく、うらやましい奴なのである。

ふだんは、わりあいお堅い仕事をしている。その職場は週に3回は休みがあるので、山小屋風の自宅を店に改装し、自分は隣のバイク小屋を『タイニーハウス』にして住み、『お客さんとのやり取りを楽しみながら、週2日だけのカレー屋をやりたい』という。器用貧乏の男も、ついに自分の『Way・Of・Life』を見つけたのか。

彼の場合、最近よく聞く『副業』とは、ちよつと違う。あれはどこか、『もう少し稼いで、今よりいい暮らしがしたい』といった匂いや響きがある。でも、彼が求めているのは『仕事を楽しみながら、自分の人生を豊かにすること』なのである。(2020年2月「音信不通」43号「『もう一つの仕事』という生き方」)

◇ ◇ ◇  
カレーは、彼と出会ってまだ間がないころ、当時珍しかったスパイスカレー作りに私が格闘しているのを見て、興味を持ったらしい。

そんな彼が珍しく生き方に迷い、相談を受けたことがある。「定有堂書店の中で本を探してぶらぶら歩くことを勧めた。奈良店主と対話しながら、何かきっかけになる本を探すのである。その結果、彼は『小屋暮らし』の本と『間借りカレー(飲食店)』の本に巡り合い、豊かな人生を送るために『週2回、カレー屋を自宅で開く』という少々変

わった副業を見つけた」(2023年5月『音信不通』82号「本屋の中をぶらぶら歩く」)

やがて彼は素晴らしい女性に出会い、3度目の結婚をするのだが、プロポーズの日に病院からがんを宣告された。新婚旅行はリバプール、奥さんとカレー屋を続けた。最初の奥さんとの間にできた息子との再会も果たした。物心がつく前に別れ、成人した息子は、不思議なことに父親と同じくドラムをたたくロッカーになっていた。

◇ ◇ ◇  
葬儀ですつと流れていたのはビートルズのアルバム『ア・ハード・デイズ・ナイト』。最後に棺が霊柩車に乗った時、流れたのは『テル・ミー・ホワイ』だった。

「僕は持っているものを全部あげたじゃないか。なぜ、そんな悲しい顔で泣いているの。教えてくれよ」(意識)  
「これで葬式をしめくくるとは、あいづらいな」。彼とは花園(全国高校ラグビー)にも出場したジョン・レノン役が目赤くして、にやりと笑った。「よう頑張った!」同じく花園仲間のポール・マツカトニー役が、小さくなっていく霊柩車に叫んだ。

## これは本ではない

— 賈マグリット風 —

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

連休の一日、実家に帰ってきた。父親の遺品(本)の整理をするから、手伝え、とのお達しである。

軍手やらビニール紐やらを用意して出掛けた。

大型本が多いものの、せいぜい百冊がとこ。三十分ほどで片付いた。

問題は、この後に起こった。

久しぶりに、物置(今の住居に持っていけなかった本を詰め込んである)に風を通そうと思って、扉を開けた所：絶句した。

## 水浸し

なのである。

母屋の雨樋が一昨年の大雪で歪んで、雨水が物置の屋根

にボタボタ落ちていて、という話は聞いていた。

しかし、物置にも屋根はあるのだし、湿気は心配だが、まあ大事なからう。その後、雨樋も修繕したことだし、と安穩に構えていたのが間違いのもと。

何と、屋根に穴が開いているではないか。それも、中からお空が見えるくらい大きな穴が。

これでは、雨が降り、雪が融ける度に、滝の如く水が降り注ぐ道理である。

一年以上、物置を開けなかったのが失敗だった。で、一口で言って、

ワヤですわ。

焼けた本は哀れだが(永井荷風、内田百閒を想起された)、水を被った本は、悲惨を通り越して凄絶である。

積んでいた段ボール箱は八箱ばかりが全滅。

悉く穴が開き、中身は黒カビで、もはや開く気にならぬ。

棚に並べていた雑誌の類も、下の二段ばかりは、ほぼ壊滅。損壊は免れても、表紙同士、ページ同士が癒着、一見無傷でも湿りを帯びて、歪んでしまっている。

恐ろしいのは、下積みになっていた本である。

ここまで、崩れるか、というくらいに崩壊している。

いや、むしろ溶解と呼ぶべきドロドロ状態。パルプに戻りかけている。カビのせいか、土埃のせいか、蚯蚓のせいか、半ば土と化している部分もあって、おお、お前も土に還るか。汝、塵より生まれし者なれば塵に還るべし。

いやあ、それにしても、重いこと、重いこと。

その上、溶けかかっているから、ヌルヌルズルズル、気色の悪いこと夥しい。自分の本でなければ、金輪際触りたくありませんね。

その溶け方たるや、背表紙はことごとく無くなり、表紙は別の本と癒着してはがれているから、何の本だか判別もできない。

面白いのは（ワタクシはちっとも面白くないのだが）、ビニールコーティングされたジャケットは、ビニール部分だけが残るのですね。蛭蟪の抜け殻みたい（そんなものは無いと思うが）にズルリと。これまたやな感じ。

とまれ、これ以上被害を拡大しないために、屋根に急愈修理を施し、穴を塞いだ。見れば、屋根一面に錆が浮いていて、こりや、大風でモノでも飛んできた日には、再び大穴が開きそうである。（築四十年ですもの）一面をビニールシートで覆いたい気分である。

後は、かつて本だったものたちの始末だが、濡れたままでは、とてもゴミには出せない。そもそも重すぎる。半月かけて、天日干し。乾けば乾いたで、これまた瓦のように、固く頑丈に固まる。いや、木の板に戻った、というべきか。

パルプになり、土に還り、つくづく本は植物由来であることを再認識したことであった。

乾いた物体は、ごみ袋に詰め、形が残っているものは紐で括り、都合二十袋と三十絡み。回収業者に依頼して、締め一万五千円也。

まあ、物は考えようで、ぼちぼち蔵書の整理を本気で考える年齢にはなっていて、日々、煩悶煩慮、懊惱憂鬱している所ではあったのだ。

いささか吹っ切れた感もあり、良いきっかけになるのではないか、とも思う。

（…と語る舌の根が乾かない内に、日本の古本屋やヤフオクで、お釈迦になった本を検索しているワタシ）

# 鳥取あれこれ その九十四

内田克彦（地域研究家）

（承前）

『山陰新報』九八号から山陰新報社役員として名が挙がる河越重喬は、続いて創刊された『山陰隔日新報』の社主となっている。河越の経歴は「元米子警察署長」とのみ書かれているが、実は幕末の本圀寺事件で暗殺された黒部権之介の甥になるのである。当時「岩越述人」を名乗っており、明治五年に改名している。手結浦へたいのうらぐでの二十士の仇討ちに、息子の清之丞とともに参加している。

『長谷川伸全集 第十卷』の「私眼抄」に、次の記述が載る。

〔前略〕雲州手結の浦仇討事件当時の本部勇之助は黒部権之介の遺児である、後に本部泰という、河田（佐久馬）はこれを援助し、本部は後に真知事とまでなるを得た。仇討組の一人、岩越述人は黒部権之介の甥であった。

述人、後に河越重喬と言ひ、鳥取県警部となつていたが絵をよくした。

さて、我部政男編『明治十五年明治十六年地方巡察使復命書』がある。その『上巻』（三一書房、一九八〇年）に、明治一五年の元老院議員河田景与による「地方巡察使復命書」が収録されており、次の記述がある。

なお、同時に巡察した島根、山口県には「演説結社ノ状況」の項目があるが、鳥取県には何故か項目がない。

## 警察の実況

概見スルニ繁盛稠密ノ市街ハ風俗淫逸ニ流レ易ク狡猾ノ悪徒出没スルヲ以テ賭博盜多ク争訴漸ク盛ナリ又各郡ノ疾苦最モ甚シキハ共弊社員等愚民ヲ脅喝シテ金円ヲ欺取スル是ナリ然レハ後害ヲ懼レテ一モ告訴届出ヲ為スモノナシ其現行犯ヲ看認サレハ警察官吏モ法律ノ問フヘキナク如何トモスルナキノ状況ナリ

『下巻』（三一書房、一九八一年）には、明治一六年の元老院議員榎村正直による「地方巡察使復命書」が収録されており、「鳥取県管内巡察記巻上」には、前年の巡察に比べて詳しく書かれており、次の記述がある。

鳥取ニテ東京改進黨へ加盟シタルモノハ県会議長崎

平内議員田中政春同八上郡布袋村木下莊平及ヒ鳥林昇造青木幹等ニテ黨員十五名ナリシカ後岡崎平内脱党シ勢力振ハス退歩ノ景況ナリ

自由党ニハ井上清人岡島正潔仙谷吉衛等アリテ山陰自由党ヲ組織セント欲スレトモ岡崎平内等ノ為メ種々遮碍アリテ目的ヲ達セサルモノ、如シ

明治史料研究連絡会編『明治史料―自由黨員名簿』の「明治一四年一〇月 自由黨員名簿」には次の名が載る。

鳥取県因幡国鳥取中町四百十二番地 村上謙

同県同国邑美郡吉方町十九番地 飯田千蔵

同じく「明治十七年五月 自由黨員名簿」には、「鳥取」として、宮崎貞蔵、岡島生潔ほか八名の名が挙がっている（『鳥取県史第四卷社会篇』一六七頁にも掲載済み）。同じ頁には、自由党左派による大阪事件と関係があつた人物として、鳥取市吉方出身の「山本鹿蔵」が載っている。

其他内藤六四郎、氏家直国、前田鈴吉、山本鹿造、吉村大次郎等の有志が、大坂府下に於て、大和の千手院、岡橋長者等を襲ひしも、悉く失敗に終りたり。「大矢正

夫自徐伝（抄）」「神奈川県史資料編13（近代・現代3）」

因みに、第一回帝国議会が一八九〇（明治二三）年一月に開会されるにあたり、七月に第一回衆議院議員選挙が行われ、第一区岡崎平内、第二区山瀬幸人、第三区松波宏雅が当選した。岡崎、松波は大成会所属である。

升味準之輔論文「日本政党史における地方政治の諸問題（二）」の中の、「鳥取県」の項に次の記述がある。

士族授産と県庁再置を中味とした対政府運動は一四年をピークとして後退するが、それには県令の抑圧も影響している。山田（信道）県令は一四年以来七年間在任したが、彼の力によつて保守派の勢力が県下に扶植される。たとえば、彼は内務卿にこんな報告をかいている――「各新聞社も論説大いに平穩に相成り、自由党の勢力次第に狂候光景なり。土佐よりは片岡直温（土佐国民黨来候）我党勢力は漸く広張し好都合に御座候……」。こうして鳥取県では、大成会・国民協会・帝政党と自由党・政友会との対立がつづくことになる。

（この項、了）

二〇二四・五・二〇

# 内坪井町日記

(1)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

五月某日

次男の入院でバタバタしてしまつたが、退院後間も無く引越しの準備で慌しかった。

子らの保育園は住まいの近くではなく、妻の仕事場の近くの町にしていたのだが、子にともだちができ、その友たちと同じ小学校に通いたいと言ひ出したのが引越しを決めた大きな理由であつた。が、妻も仕事に通ひやすくなるし、自分もまた市街地の近くに住みたい気分だつたので、思い切つて物件を探したのであつた。

新居は熊本市中央区内坪井町。今も熊本市が保存している夏目漱石内坪井町旧居の目の前で、その素晴らしい庭を借景できる古いマンション。偶然だが隣の部屋は妻の知人階下の方は長崎書店時代の配達先の「主人」であつた。長崎書店まで徒歩7分。今回より八代日記を改め、内坪井町日記とさせて下さい。

漱石旧邸は建物も立派で、記念館として公開されている内部に一度入館したが、部屋の数がずいぶんたくさんあるし、風通しは良いし、ここに住ませて欲しいくらい。明治二九年、第五高等学校（現在の熊本大学）の英語教師として来熊した夏目漱石の熊本で五番目の家で、一年八か月ばかり暮らしていたとのこと。

内坪井町のことはよく知らなかつたのだが、丁目のないかなり狭い地区で20分くらい外周を散歩できそう。坪井川というまったく綺麗ではない細い川が近くを流れており、毎日「橋を渡る」というイベントが発生して楽しい。子の登園も車から徒歩に替わりいい運動になっている。

隣町は以前住んでいた坪井だが、坪井はかなり広い。斜向かいは上林暁の上林町だがこちらはもつと狭いようだ。通勤距離は以前ときほど変わらないが、前と違って高速道路が近くにないため時間がかかる。が、高速代は節約できるので前向きに考えよう。また部屋数も少なくなつたので、自分の部屋もなくなつてしまつたが、実家をどうにかして活用する方向で考えていきたい。

五月某日

ゴールデンウィーク明けが引越しだったのだが、連休中は稼ぎどきで、仕事の休みはほとんどなくて少し疲れ

た。

節句には出世鯉という菓子を取売するのだけど、これはとてもいいお菓子だと思ってるが、売るセンスがなくてない。プロデューサーが欲しい。

五月某日

上林暁のことをぼんやりネットで眺めていたら、杉並区天沼で死去とのこと。自分が東京で初めて住んだ所の近くだ。ちゃんと読んでみないといけない。

五月某日

レバークーゼンがぶつちぎっている。ブンデスリーガの無敗優勝。かつこれまでシーズン無敗。シャビ・アロンソすごいんだな。

しかしさらに美しいアタランタ、ジャン・ピエロ・ガスパーリニ先輩がヨーロッパリーグにてレバークーゼンを3-0にて打ち負かす。素晴らしすぎる。

プレミアは、アーセナルが惜しかった。選手層の差ですね。わずかなようで、結構分厚い差かも。来シーズンも健在で頑張ってる欲しい。

チアゴ・モッタはユベントスに行きそう。アツレグリは好きだったのだが、モッタにはユーベを復活させて欲しい。

フレッシュユだった頃のネドヴェドやデル・ピエロの映像25-  
を見ると惚れ惚れする。しかしインテルは強かった。が、  
若き中国人オーナーが、チームを売却せざるをえなくなっ  
たらしい。同じくらいいいオーナーと替わるといいが。

五月某日

円安が恐ろしすぎる。数ヶ月先にやってくるであろう原材料の値上げに耐えられるのだろうか。

# わたしのことば

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

東京都現代美術館で行われている『翻訳できないわたしの言葉』展へと向かった。五人のアーティストによる言葉や言語についての展示である。

\*

まず初めは、日本とフランスで活動するユニ・ホン・シャープによる映像作品。そこには、彼女の娘が捉えられている。画面の端に鏡があり、映像を撮っている作家自身が映り込む。そこでは、フランス語の短いフレーズを話す母の発音を「矯正」する娘が映る。

正しい発音とは何か？英語を教えている私からすると、「きれいな発音」には至らなくても、「誤解を招かない発音」には辿り着きたいと思っているところがある。例えば、「Sit down.」とよく使われるフレーズは、日本語に合わせる発音すると「シットダウン」≡「Shit down.」と全く違うもの、不適切なものに聞こえてしまう。

一方で、発音は社会的階層にも結びついている。ミュージカル『マイ・フェア・レディ』は発音矯正によって地位の向上を目指す女性の物語だ。英語ばかりではない。日本

語を話す日本人の一人である私も、「こうあるべき」という日本語の発音にとらわれ、カタコトの日本語をどこまでフラットに受け入れているか、分からない。

\*

アイヌのルーツを持つマユンキキは、自分のルーツに関わる言葉・文化が奪われたことの痛みを映像作品だけでなく、小さな部屋の展示としても表現している。彼女は、自分の祖母がアイヌ語の方が流暢だったことに衝撃を受け、母語を日常的に使えないという苦しみ直面した。

作品の中で、彼女は一緒に活動をする通訳・田村かこのとも対談している。あえて、マユンキキ自身が英語を話すのではなく、通訳・翻訳を介して話す「権利」。透明な壁ではなく、人を介することに今の時代では意味が込められるのかも知れない。

思えば、英語を母語として話す人は、「自分の言葉が全く通じない」という壁にあまり出会えない。どこに行ってもある程度英語は通じるし、「英語を話してもらえれば」と期待してしまうだろう。英語のネイティブでないことが辛い面もあれば、日本語話者だからこそ、その壁に気づき、四苦八苦できた面もある。母語でない言葉を使うもどかしさは、まだ想像できるかも知れない。

\*

南雲麻衣は、母語は音声日本語でありながら、第一言語を日本手話としている。三歳で失聴したからだ。

聴者である母、そして、ろう者の友人たち、聴者のパートナーとの日常。三つそれぞれの会話をテーブル越しに見ていく展示であった。ろう者の友人たちとはもちろん手話でおしゃべりしつつ、レゴで家族の場面を作り上げていく。せわしない会話が続いていく。聴者である母とは、言葉が早かったという幼少期の思い出が語られていく。

\* 次の空間には畳がいくつか置かれている。上には大きなポリ袋が、膜のようになびいている。

ここは、新井英夫の展示空間で、「身体の声を聞く」仕掛けがさまざまな置かれた体験型の展示である。新井自身が教育や福祉の現場で「からだを奏でる」ワークショップを行なっている。その活動の中で、自身もALSになり、体の動きの制限がどんどん進行している。そんな中でもかすかな動きで表現している。

\* 唯一写真撮影がほとんどできない最後の空間。大きな壁にはインタビュ어의音声とある学校の風景が流れ、手前にはそこに通う生徒たちの全身が映し出される縦長のモニターがいくつか置かれる。まさに「Eye to Eye」で対峙で

きる。これは、五人目のアーティスト金仁淑が、滋賀にあるブラジル人学校・サンタナ学園を訪ねて作った作品だ。

日系ブラジル人として括られる彼らの鮮やかな時間。そこには、さまざまな年齢、見た目の児童生徒が現れる。

\* 言葉と日本人性。日本語を話せば、日本人なのか？いや、話せる日本語が「真正な」日本語でなければいけないのか？英語を教える意味はあるのか？

最後の空間には、そんな鑑賞者の感想が飾られていた。『翻訳できないわたしの言葉』展の英題は、『Where my words belong』とされ、「翻訳」という言葉はない。

私の言葉が属するところは、一体どこなのだろう？時々、自分の母語が失われてしまう夢を見る。誰にも通じず、誰にもわかってもらえない。そうならないように保険をかけて、他の言語を学んでいるのかも知れない。

ただ、今の私は同じ母語を話す人々に囲まれて暮らす選択肢が容易に取れる環境にいる。その特権的な立場に気づく必要もあるだろう。

それでも、私の言葉は私のうちに。  
あなたには踏み込めない、私の内側に。



あきの素生

(くうねるめがね)

車から降りると、黒い鳥がすいと後ろをとおった。その速さに興味を惹かれて目を凝らす。燕だ。渡りの季節からしばらく経つはずなのに、今年初めて目にした気がした。燕の姿は、田植えの済んだ水田を思い起こさせる。気づけば初夏だ。

お風呂屋さんが好きだ。ここ数年足が遠ざかってきたが、ぼつりぼつりと温泉や銭湯に行くことが増えてきた。行ってみると、大きな湯船は気持ちしが広々とするし、ぼわんぼわんと聞こえてくる、湯を流す音や小さな話し声が心地よい。音は、湯気に満ちた浴室の、天井辺りまで立ち上り、そこから響いてくるように感じる。たくさん人がいても、周りの気配は淡くなり、意識は自分に向かいがちだ。といって、何か意味あることを思索するわけでなく、ぼつと浸かっているだけで、時間が溶けていく。こんな過ごし方ができたなら、その日は贅沢な一日だ。

近年サウナが注目を浴びている。というか、もはやブームとしては落ち着きつつあるようにも感じる。なぜ今さらサウナなのかと問われれば、自分がお風呂通いを再開できたのが最近だから、である。コロナ前もお風呂が好きであり、行った浴場にサウナがあれば大概入っていたのだが、お風呂屋さんに行かなくなっていた期間に、「ととのう」という言葉を頻繁にと言っているほど耳にするようになって。自分に関していえば、もともとは、発汗による「デトックス」であるとか、痩身効果へのきさやかな期待なんか、サウナに足を踏み入れさせていた一番の動機で、心地よさを求めていたわけではなかった。どちらかというと苦行のような。それが、サウナに入ることによって、「ととのう」ことができるらしいと聞き及んで、「ととのう」とはいいたいどんな感覚なのか、知りたくてたまらなくなってきた。

久しぶりにお風呂屋さんに行ったとき、サウナに入った。久しぶり過ぎて体がついていかなかったら、貧血でも起こしたら、とにわかに心配になり、おそろのおそろ、少しだけではあったが、心配は杞憂に終わり、次回はもつと長く入ってみようと心に決めた。

サウナの中は、独特の匂いがする。焼けた空気の匂いなのか、サウナ室の木の匂いなのか。子どもの頃通っていたスイミングスクールにはサウナ室があった。小さな体を1時間近く水に浸けているので、それを温めるために設置されていたのだろうか。レッススが終わり、目を洗ってシャワーを浴びたら、インストラクターの先生と一緒にみんなサウナに入る。サウナの中では、なんとなく静かにしていた。暑くてはしゃげなかったのかもしれないし、はしゃぐと危ないから静かにするように言われていたのかもしれない。サウナの匂いと、さばさばとした感じの先生が好き。なアイドルグループの「押しメン」（当時そんな言葉はなかったけれど）について、言葉少なに語ってくれたことだけ、妙に記憶に残っている。

「とどのう」ためには、サウナ室から水風呂、外気浴という手順を踏むとよいと聞き、実践してみた。最初はびんとこなかったのだが、二回目実践したとき、ほんわりとした心地よさを感じた。これが「とどのう」かとうれしくなった。が、その心地よさの中で、自分はこの感覚を知っていると思った。それは、水泳の授業のあとに、うつすらと全身を包むあたかきと気怠さだった。水泳が好きだったが、それと同じくらい、この感覚が好きだった。あのと

き私はとどのつていたのか。それとも、まだ知らない「とどのう」が存在するのか。今のところ、その答えを知らない。ようがないけれど、心地よければどちらでもよいではないか、とも思う。

無計画な旅の中で手持ち無沙汰になりそうだったとき、日帰り入浴施設が目に入った。知らないお風呂に入るのもいいなと立ち寄ったところ、種々のお風呂とサウナがあり、思いがけず、楽しい時間を過ごすことができた。食いだおれ以外にも、旅の楽しみを持つことができそうだ。

イラスト あきの素生



定有堂教室案内サイト (@ドメラリア)



奈良敏行十三砂慶明編

『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』

作品社 本体2200円 46判上製

ISBN978-4-86793-013-7

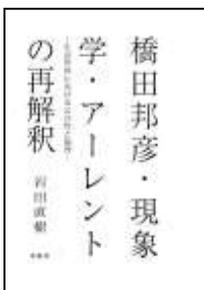
発行 2024.2



岩田直樹『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』

―生活世界における公共性と倫理― 小取舎 2023

一八〇〇円本体



## ご案内



ドラマメリア (座敷わらし)

定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

6月25日 火曜日 19時から

テキスト 橋場弦 『古代ギリシアの民主政』 岩波新書  
会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

6月13日 火曜日 19時から

テキスト 木田元『現象学』 岩波新書 (前回のつづき)  
会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「読書室、ピオトーブ」小説を読む会です

6月6日 木曜日 第12回 19時から

テキスト 森博嗣『それでもデミアンは一人なのか?』

講談社タイガ文庫

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

太極拳教室 (葉香クラブ) 会場 二力所

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時から 市役所 麒麟スクエア

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員 (ナラ)

三段 公認B級指導員 (みちる先生)

・編集後記:

乱気流の中で誰もみ飛行をしているような日々を過ごしているうちに、今年度も二ヶ月が経ってしまいました。

「SHEEPSHEEP BOOKS」、早速行ってみました。仕事帰りに本屋さんに寄るのは一年ぶりです。

ドラマメリア (編集長)

定有堂書店が閉店して、約一年、五月十八日に定有堂の二階に、小さな本屋がオープン。「音信普通」寄稿者の高木善祥が店主です。本好きの人たちの夢を担っての開業です。店名は、SHEEPSHEEP BOOKS。由来は本文に語られています。本屋「The 辻山さんの新刊『しごと』十人の本屋』朝日出版社を「寄贈いただきました。定有堂もそのなかの一人です。『街の書店が消えてゆく』創出版社も「寄贈いただきました。読み応えのある特集です。

奈良敏行 (発行人)